

風土集



神蔵器選

岩倉具視 卿旧宅や赤蕪 京都 橋添やよひ

田終ひの煙這はせて桂垣

洛北のひと日の寧し落葉踏む

一葉余す「軒端の梅」や冬に入る

念仏や吹き窪めては十夜粥

小春日に引き出されたる畑かな

逝く秋のひかり治し桂郎忌

銃肩に少し猫背の漢かな

箸長く使ふ娘と居り初霰

桂郎忌波郷忌の過ぐ空の色

泥葱を積みこむ海の渡しかな

冬ばらは高きところに咲きにけり

補陀落はそこまでが海石露咲けり

ふる里に亡母ゐて遠し枇杷の花

つまづいて道の真中冬立ちぬ

横須賀

平田紀美子

秋田

工藤ミネ子

御所参観の許可一時間小鳥来る 横浜 安永圭子

十一月廿五

天空の宴の時刻冬満月

ユトリ口の母に母あり新酒かな

田の中のハム工房や秋の風

耳大木彫りの蕪村椿咲く

冬兆す目鼻のなくておしらさま

山の背にひつかかり来る雪起し

冬の蝶退け際に置くねまり石

大藁家縁側二間豆小豆

冬兆す兎親子は隅が好き

思ふほど寒くはならず一ノ酉

水涸れて滝の高さを思ひをり

武蔵野の白鳳仏にしぐれをり

一茶忌や土蔵の中の喫茶店

川崎

浜口恵以子

岩手

杉田春雄

高気圧が張り出し出しているときの寒冷前線通過に伴い起きる。天地が俄かに暗くなつて突然烈しい雷光があり雷鳴がとどろくが、音の大きなわりに、この句のように終りぎわに山にひつかつたような歯切れの悪い音である。その上大きな音は一つきりで、二つ三つある場合でも後のものは口の中でつぶやくように消えてしまふ。雪国人でないとならない句である。

松手入細かき音の降るばかり

根岸 善行

松の新葉が完全に伸びきり、十月頃には古葉が色褪せて赤くなつてくる。伸びた枝をおろし、うまく枝を撓めたりして樹形を整えることも大切なことだが、主たる仕事は赤くなつた古葉をむしり取ることである。従つて職人が懸命に働いていても大きな音はせず、むしり取り、つまり取られた古い松葉が、かすかな細い音たてて降るばかりである。次第に日も短くなつた秋の午後の日の中に古く鋭い松葉の乾いた音は、かえつてあたりの静寂を深め、ものの哀れを感じさせる。

風垣や 鐮を削る 日本海

大森 尚子

日本海岸の海べりの家では、ことに海からの北風が厳しい。家の北側に板・藁・葎などで、出来るだけ高く頑丈な高い囲いが作られる。見た目には競う侘しくも趣のある冬の風物詩であるが、風垣の外側の日本海では大変である。連日のように強風が吹き荒れ、高波、大波がぶつかり打ち合つて鐮を削り荒れ狂っているのである。平成十四年二月、私も名古屋の方々と佐渡へ渡つたこと

があつたが、その日は晴れていたが風が強く、終日高速フェリーは欠航、一万トン級の船に乗り換えて行つたことがあつた。冬の日本海のすさまじさを「鐮を削る」と中七の短い中での描写は見事である。本号白眉の作。

数へ日や子に書く封書量らるる

菅原 末野

数え日は幾日からといった限定はないが、指をおつて数えられるほどの日数というので、冬至の終つた二十三日頃と思つている。お子さんは正月に帰省されるのかされないのか解らないが、数え日になつてお子さんに出す手紙は色々たことこまかく書きつらねて、知らず知らず長い手紙になつてしまつたのであろう。郵便局で量られて超過分を払わされた。この超過分は母の愛情である。

初冬や水槽めきし神輿庫

奥田 茶々

大宮神宮の吟行の折の所産のようである。本殿へ向つて左手の奥に、杉並の各町内の神輿が子供御輿まで全部ガラス張の屋内に展示してある。庭は大樹が鬱蒼として昼も薄暗い。神輿は何れも金銀に輝き妍を競つていて、水槽の中にあるごとく見えた。

枯れ落葉湯宿へ塩の配達に

藤原 キヨ

キヨさんは平成十七年で八十六歳、商売も俳句も現役である。昨年から殊に雪が多い。くれぐれも気をつけて欲しい。

風土独語／神蔵 器



念仏や吹き雀めては十夜粥

橋添やよひ

作者は京の人であるから、この句は真如堂での念仏法要であろう。現在、真如堂では月遅れの十一月五日から十五日まで行われ、十五日の結願の日は早朝から檀家の婦人らによつて小豆粥が接待されるのである。勿論、それも結構であるが、欲を言えばことに冷えこむ寒い京の冬の夜半、僧より給わる熱々の小豆粥碗を両手で囲みフウフウ吹き雀めながらいただくものであったら、仏の有難い慈悲に身も心もあたたまり、生きていく喜びが湧き上るのではなからうか。

小春日に引き出されたる畑かな

工藤ミネ子

十一月中旬から十二月のはじめ頃、いよいよ寒さも本格的になつて来たと思つていると、松本たかしに「玉の如き小春日和を授かりし」とあるように、思いがけずよく晴れた暖かい日がやってくることもある。

この句、面白いのは、小春日に引き出されたのは作者であるが引き出されたのは畑そのものであるように錯覚することである。

ミネ子さんの五城目町は、秋田平野の北のはし、馬場目川の流れている中間あたりにある。町の東と北はほとんど山地であるが、

ミネ子さんの下山内あたりは、すでに平地が多く、農家は稲作が主であるようだが、専業農家でなくても一家の家族の食べるぐらの野菜など作る畑はこの家も持つている。

先に小春日は十一月中旬から十二月初め頃と書いたが、五城目あたりではもう少し早く大体十一月中旬頃であろう。畑作は白菜、大根の収穫が主で、葱やキャベツが僅かに残っているところだろう。造化の神の恵み、神の配慮か、長く厳しい冬を迎える前に、小春日和をもうけ畑を引き出して、人間のために畑の恵みを収穫する機会を与えて下さる。有難いことである。

幾日か小春日が続けば、間もなく初雪が舞い、やがて根雪となつて長く厳しい冬の日がつつく。

泥葱を積みこむ海の渡しかな

平田紀美子

この海の渡しは、伊豆諸島か小笠原諸島などの何れの島か、作者が横須賀の人とする猿島かななどと思つたりしたが、どうもそうではなさそうである。例えば浦賀湾を東西に横断している和船のような小さな舟かと思われる。主として人間より三浦半島などで出来た葱とか大根、白菜、そして頼まれれば日用品なども運ぶといった民間の渡し舟である。当然、葱も洗つたものではなく掘り取つた泥のついたままである。川の渡しとはまた異つた厳しい状況が見られ、人々の生活が実感される。

山の背にひつかり来る雪起し

杉田 春雄

北国で雪の降り出しそんな悪天候に鳴る雷で、優勢な大陸の

山河集

同人作品



神蔵器選

醉客の花買ふ夜や冬近し

保田英太郎

山茶花や十一月の通院日

冬田中抜けねば着けぬ珠算塾

冬の雁カタカナ文字を空に書く

帰宅せるひとりの我に笹子鳴く

冬の波聞かずも聞こゆ佐渡おけさ

大森 尚子

金山の凍てる掘り跡 鑿泣く

一町歩佐渡の冬田の雀どち

風垣や鎬を削る日 本海

そぞろ寒暗へと落つる狸穴

菊焚いて居りし香りとすれ違ふ

小林 和子

足利学校

漢藉二千字降の松色変へず

しんがりの鴨着水の煙上ぐ
切株の年輪濡れて時雨過ぐ

鎌倉

火を落す小町の路地の焼芋屋

裂織の布裂く夜の時雨かな

菅原 末野

数へ日や子に書く封書量らるる

乳牛の出産間近冬ざくら

菊人形仕上げの霧を滴らす

一弾の村覚ましたる狸初

締太の十二鞋や初仕事

松崎 雨休

初氷割つて砥石を浸しけり

念ずればひとつ波生れ大旦

門松や東の佐倉順天堂
待合に風邪の女子の双子かな

鳥もすこし旅をして来て囀れり
一直線に浅春の川海に入る
春宵やこぼれ話にふと涙
ひとり来て針納めたる男かな
鶯の恋の初音を漏らしけり
実朝忌金槐集を誰が越えし
何か齎し何か連れ去る春一番
春しぐれ屋根ことごとく輝きて
白魚の室見にわが師老いたまふ
温泉の素たつぷりと余寒風呂

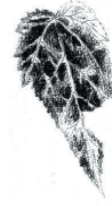
浅春雑詠

— 島谷 征良 —

猫柳風も光を得たりけり
鳴る海や疵ひとつなき落椿
庭の幸三つ四つ五つ露の臺
牡丹の芽百花の長として朱し
片栗が咲き木漏日のごとくなり
春寒の夜更かし三日つづけり
春の泥光をためてゐたりけり
風光る生簀の魚をきらめかせ
うららかなや溪流に水もどりきて
古書店に手が出ぬ一書冴返る

竹間集

同人作品



笹鳴き

相沢有理子

鮭ほぐす箸止む事故の報またも
町内の畑の案山子を誉めそやす
鴨来鳴く彼方うすうす地震雲
居間深く射しこむ冬日香焚きぬ
名儀書替へおほかた終る神無月
笹鳴きのしきりに夫の忌を修す
足慣らす庭の水やり返り花

雪 蛸

小林 輝子

もみぢ且つ散るみちのくに青邨居
山に音なき日を選び根深引く
落葉追ふ風風を追ふ落葉かな
大根引く北へ北へと雄物川
降り積みて男いてふの落葉かな
血のいろの残菊括る漢かな
寄れば去り離れば寄り来る雪蛸

冬すみれ

小野寺節子

立冬や言ひ訳ほどの通り雨
分け前の木漏れ日拾ふ冬すみれ
ふしくれの手庇富士の笠雲に
雪蛸いのち一つを淋しめり
鳥渡る気配に道をあける雲
胸中の鏡を拭ひ春を待つ
「桂郎」の言伝ですと雪婆

雪まじり 駅伝ランナー五人ぬく
竹柄杓 水にこゑあり 冬桜
寒満月 歓喜のごとく 葱畑
くろがねの 一花の高し 冬薔薇
菰卷や 名のある 松も無き 松も
水平に 動かぬ 撞木 寒に入る
煙々と 豪華客 船年の 逝く



冬
桜

神
蔵

器

初 日 さ す 白 式 尉 黒 式 尉

ふるさとの地にくちづけす初日の出

元 旦 や 二 羽 の 目 白 の 色 紡 ぐ

大学箱根駅伝 三句

駅 伝 や 氷 れ る 雨 の 奥 へ 奥 へ

白 息 の 後 ろ に な び き 先 頭 切 る

風土

